

生きる権利を主張し貞享騒動を主導

多田 加助 (ただ かすけ)

三郷 中萱出身

<加助が活躍した時代>1639年(寛永16年)～1686年(貞享3年) 享年47歳

西暦	1639年						1664年	1674年	1681年		1686年				
元号	寛永16	正保	慶安	承応	明暦	万治	寛文4	延宝2	延宝9	天和	貞享3				
ゆかり	安曇郡中萱村の庄屋に生まれ、幼名は「三蔵」。						以後「庄屋彦三郎」と名乗る。	家督を相続し庄屋となる。	大區作のため庄屋彦三郎(のちに訴え、蔵込めの刑に処せられる)が年貢減免を役人に訴え、蔵込めの刑に処せられる。	げられ、庄屋彦三郎、庄屋役を召し上る。	上中萱村の年貢が滞っているため庄屋彦三郎の妻が藩役人のため庄屋彦三郎の妻が藩役人としてとられる。	九月、加助、年貢徴収の役人に年貢が納められない事情を申し出て、杖で殴られる。	十月八日、加助、再び訪れた年貢徴収の役人の厳しい取り立てに反抗し、役人より叱りを受ける。	貞享騒動(加助騒動)起こる。	十一月二十二日 死去。

村人の生活を第一に考える加助の性格

村に残された記録や、周辺の村々の庄屋が残した日記には、生きる権利を主張して闘った彦三郎(のちの加助)の様子が記録されている。

貞享騒動の12年前の延宝2年(1674年)、この年は大不作であった。庄屋彦三郎(加助)は過酷な年貢の減免を藩に訴え出た。手順を飛び越えて藩に直接訴え出る彦三郎の行為は、江戸時代、厳しく禁止されており、彦三郎は罰として「蔵込」の刑を受けている。また、代官の言うことをなかなか聞かない彦三郎は、延宝9年(1681年)庄屋職を召し上げられてしまった。庄屋職を召し上げられた後も、加助(「加助」は庄屋職を召し上げられた後の名前)は村の窮状を役人に訴え続け、あまりの勢いに役人から杖で打ちかけられることもあった。



多田加助木製座像

水野家にふりかかる災い

貞享騒動を主導した罪で加助が処刑された後、松本藩主であった水野家では、災いが立て続けに起こった。直系の忠周が25歳、忠幹が25歳で死去。次の藩主忠恒は江戸城で刃傷沙汰(刀を抜いて切りかかること)を起こし、大名から旗本に格下げになるなど不幸が続いた。このため、水野家は密かに加助の坐像を作らせて供養していた。

加助が後世に与えた影響

明治近代国家が誕生した後、加助たち犠牲者への思いが、自由民権運動を押し進める原動力となった。豊科の法蔵寺の武居用拙塾では、加助の研究が行われた。ここで学んだ松沢求策は「民権鑑 嘉助面影」という劇をつくって松本平で上演し、これを見た住民を国会開設運動を立ち上げる運動へと駆り立てていった。また、1916年には、半井桃水の新聞小説「義民加助」が朝日新聞に連載され、加助の功績が全国的に知られることとなった。江戸時代には謀反をはたらいた罪人であった加助は、明治維新以降には民衆の正義の代弁者として、その価値が見直されていった。



<貞享義民社> 明治13年、貞享騒動200年祭を期に、貞享義民社が造営にされた。このとき、水野家が密かに供養していた加助の座像が贈られた。坐像は現在、御神像として同社に祀られている。義民社周辺には、加助の墓や邸宅跡も残されている。



義民社内 「二斗五升」の碑



義民社裏手にある多田加助の墓
戒名は「梧雪業頓居士」雪のような身の潔白、突然の死を受け入れた人という意味。



<貞享義民記念館> 貞享騒動の義民の業績をたたえ史実を後生に伝えるために平成4年に開館。貴重な資料と映像で郷土の歴史と文化に触れることができる。
安曇野市三郷明盛3209 電話 0263-77-7550
URL : <http://www.anc-tv.ne.jp/~gimin/>

<参考文献> 「時事追憶(三郷村合併50周年記念誌)」2005年 「安曇野と義民一族の実像」田中薫 2000年信毎書籍出版センター 「三郷村史」三郷村史刊行会 「義民加助」 「貞享騒動 惜別の賦」長岡昭四郎 1993年企画・出版安曇野 「貞享義民一揆の実像」田中薫著、信毎書籍出版センター 半井桃水 1917年～東京朝日新聞連載小説「義民加助」